
とらのいをかゝるねずみ

閑野 寅歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とらのいをかるねずみ

【Nコード】

N61870

【作者名】

閑野 寅歩

【あらすじ】

星蓮船以前のお話。影で妖怪を助けていることが知れた聖とその妖怪たちが捕らえられ、聖のいた寺には、星とナズーリンだけが取り残されてしまう。毘沙門天の代理人として寺に残った星は、なんとか寺を維持しようと尽力するが、人間たちは寺に近づかなくなり、寺は荒廃していく。人も妖もいなくなった寺でとうとう星は心折れ、寺の御堂に籠ってしまふ。それから四ヶ月が過ぎ、とうとう心配になつてきたナズーリンは。星を御堂から出すため、一計を案じる…。星とナズーリンのお話です。星ナズ要素がむんむんですので

注意。あんまり甘々ではありません、その上ぐだぐだした展開。

(前書き)

本小説は、東方projectの登場キャラクター、寅丸星×ナズリンのカップリング小説となっております。カップリングがアウトな方にはお勧めできません。

そして、原作の流れをすこし把握してないと理解が難しい点もあるかもしれませんのでその点もご了承ください。

例の如く、今回もぐだぐだした展開です

聖が去ってどれくらいの時が流れたのだろうか。

裏切り者の住処とされたこの寺に訪れる人影が絶えてどれほど経つだろう。

それでもここに居る毘沙門天が、この寺の堂にこもってから、
いつたい、どれくらいの時が経ったのだろう。

「ご主人、」

季節は冬の色。寺の一角にあるお堂。

そこに私のご主人が引きこもってから、もう三月は経っていた。
ピタリと閉じられたお堂。

そこには私の鼠さえ入る隙間もなかった。

おそらく、なにかの術で内から閉じているのだろう。

すなわち、その間。水も食料もない。あまつさえ書物さえもない、
何もないお堂に籠もっている。

もう、三月も。

聖が捕らえられ、慕って集まっていた妖怪や人間。その全てから
見捨てられたこの寺。その責任を感じているのだろうか。

いや、聖だけが捕らえられ、自分は毘沙門天の使いなどとしてこ
こでのうのうと暮らすことは出来ないという罪悪の方が大きいだろ
うか。

いずれにせよ、もう三月も絶食していることに変わりはない。

すると情けないことに、私の腹がかなり大きめに音を立てた。

「…………ぐ、ご飯にしようか……」

絶食、という単語で、胃腸が食い物を欲したのだろうか。我ながらなんとも俗な胃袋である。

配下の鼠でも使って狩りでもするかと思い立ち、お堂に背を向け歩き出す。

が、やはり閉じられたお堂は。私の心に残り続けた。

「いったいどうすればいいと言うのだ」

四月が経った。このころになるともう寺はかつての面影を完全に失っていた。

ただの不気味なぼろ家。そう呼んでしかるべしという態を成していた。

それでも私のご主人は、お堂から出てこなかった。

流石の私も苛立っていた。

一体いつまで、閉じこもってるつもりなのだ。と。

私のご主人は、仕事はきっちり成される方だが。いくらか間抜けであるところは否定しない。いや、むしろ肝心なところで間抜けだ。確かに元からマイペースというか、まったりしたところはある。

だが、

——部下を一人放っておいて、なんとも思わない方ではないはずであった。

……待っている私を、少しも気にしない方では、ないはず。なのだ。

元来、優しいお方だ。

いや、だからこそ、その身の罪悪から籠もってらっしゃるのだろうが。

正直なところ、私は恋しかった。

ご主人が見せる、あの優しい微笑みが。

どんなにつらいお勤めでも、微笑みながら、その役割を果たしていった。

私のようなものにさえ、つまらないことを手伝っただけでさえ、ただすれちがっただけの時でさえ。

にこりと、微笑んでくれた。

思えば最初からそうだった。

私をご主人を監視するために送られてきたとも知らずに、最初からあの笑顔であった。

ご主人の側がなんとなく安心するのはそうだったからかもしれない。

だがそれは、聖が捕らえられてから全て変わってしまった。

村沙も、一輪も、ほかの妖怪たちもまとめて封印された。

ご主人は寺の存続に全力を費やした。聖無きあとも、寺を維持し、いずれその罪晴れるときまでそうしようと。

だがその願いは、かなわなかった。

人間が遠のけば寺はどうしようもない。ただ廃れるのみだ。

それを確信してしまった時のご主人など、私は見てられなかった。とても悲しい、微笑みだった。ひきつったという表現ではない、

冷たかった、凍ったような微笑みだった。

あの時だ、私の大好きなご主人から。微笑みが消えたのは。

だが、いつまでもあの出来事を恨んでいてもしょうがない。

何につけても、まずはあのお堂から出てもらわなければ何も始まらないのだ。

しかし、どうしたものか。

そんな時、またしても私の腹が音を立てた。しょうがない腹の虫である。

だが、今回ばかりは、その音で思い当たる節があった。

頭の中で、急速にまとまった案。ざっと吟味して、くだらないとも思ったが、それよりも何もしないよりはましであろうという結論に至った。

思い立ったが、吉日。

「……それなら、私にも策がある」

閉じたお堂に、私は挑戦状をたたきつける気持ちで、そう言った。あの笑顔を取り返すため、この際何でもしてやろうではないか。そんな気分であった。

「ご主人、」

五月が過ぎた。

私は、日が沈んで少したったところを見計らって閉じられたお堂に声をかけた。

反応はない。だが、気配はしたので私は続けた。

「ナズーリンです。ご主人、夕餉の支度が出来ています」

この一月をかけた、渾身の一計を放つ。

「ナズーリン……？え？あなたが……夕餉を……？」

すると、扉の向こうから弱々しいながらも声がした。

私はその弱った声に胸を痛めながらも、中の反応に注意を払った。ご主人は優しいお方だ。

「……私は、食べたい気分ではありません。あなたが食べてしまってください……」

また弱々しい声。だがここで引き下がるつもりはない。

「いえ、私はもう食べました。ご主人のためだけに、用意したのです」

だからその優しさを逆手に取る。

自分のためだけにそうされたと聞いたなら、断るのは申し訳ない。特にご主人は、人の誘いを無下に断れない性格だ。

必ず、何かしらの反応はあるはずだ。

しばらくの間。

お堂の中で、衣擦れの音が微かにした。

扉がごとりと、と音を立てる。おそらく門を抜いたのだろう。

そして、扉はゆっくりと開いた――。

ご主人はかなりやつれていた。

扉にかける細い手が、やせた頬が、ふらついた足元が、ご主人の心を表すようだった。

私はその姿を見てこみ上げるもの一切を閉じ込め、ご主人を無言で案内した。

今度は、私が閉じこもる番である。

あらゆる感情を押さえ込み、私はご主人に可能な限り、微笑んだ。逆だ、そうしなければ、泣き出してしまいそうで。

ただ、微笑んだ。

本堂まで行くと、私の計略の切り札が待っている。

「とにかく、どうぞ」

私は、用意した部屋へ入るようご主人を促した。

少し困惑気味ながらも、ご主人は従った。

おそらく、私が夕餉を準備したという事実が意外なのだろう。私は元来そんなことをする性質ではないと知っているからだ。

「これは……！」

部屋に入ったご主人は、驚いた声を上げた。

用意されているのは、鍋、である。

私は、なぜご主人が驚いた声を上げたのかすぐ察し、にやりとした。なにせ、入ってはいけないうものも、入っている鍋であった。

「季節はこれから冬です。なので、温まるものを用意しました」
鍋の前に鎮座されながらも、鍋の中身を驚きの目で見るご主人をよそに、私はいけいけしゃあしゃあとそう言った。

仏門では本来、肉は食べてはならない。

：鍋には、もうこれでもかと言うくらい肉が入っていた。

だが、私のご主人は肉を食べたくないはずはないのである。

なにせご主人は、元が虎である。

おまけに腹はすいてすいてしょうがないはずなのだ。

箸を伸ばしたくてしょうがない、はずである。

「な、ナズーリン、これ：は：」

ご主人が少し震えながら、弱々しい声を発した。

だがその震えは、怒りでもなければ悲しみでもないことを私は知っていた。

飢えた虎なれば、肉を前にして喜ばぬはずない。だが、ひとたび油断すれば食べてしまいそうなので、その欲求を抑えるために必死だから震えているのだろう。

そこに止めを刺すつもりで、私は丁寧にこう言った。

「私は、仏教に明るくないものですから。：何を食べてならぬのか、わかりません」

にやりとしながら、私は続けた。

「何か、不都合なものでもあったでしょうか？」

ご主人が、どこか愕然とした表情をした。最後の一線が崩壊したような、そんな気分なのだろうか。

それに、今。ここは寺としての態も成していない。

仏門の規則など、破って叱るものなどここにはいなかった。

たとえばご主人が規則を出して、この料理を拒もうとも、私は無理やり食べさせようと思っていた。

とにかくご主人に元気になって欲しかった。そして、仏門から少し切り離れたかった。

聖無き今、仏門に走ったとて救われるものではない。なぜなら、その仏門を求めるものなど今は誰もいないからだ。

そこにのこるのは、ご主人の苦勞のみ。そんな空しい日々から、戻ってきてほしかった。

私のその意志が通じたのかどうかはわからないが、ご主人は、少しの諮詢のあと。ふと私の方へ顔を向けた。

あきらめた、そんな感じの表情であった。ただ、その中には、陰鬱な影はなりを潜めていた。

「…いえ、ナズーリン」

「はい」

名を呼ばれ、姿勢を正す。

「ありがとう」

——優しく微笑みながら、ご主人はそう言った。
久しぶりに見た、優しい笑顔だった。

私は、なんだか恥ずかしくなって視線を逸らした。
やっと見れたと言うのに、それを見たかったはずなのに。

「……私は、偉大な毘沙門天様に仕える身。これくらい、のことは、当然です」

ぽつりぽつりと私は言った。
泣いてしまいそうだ。

その笑顔が、あまりにまぶしくて。

それを、私が取り戻せたのが、うれしくて。
ただ私は、うつむいていた。
そうでなければ、あなたの笑顔に吸い込まれそうで。

「ふふ、では、ありがたくいただきます」

私が泣きそうになっているのには気づかなかったらしいご主人は。
ありがたいことにそういつて箸を取った。

「あ、どうぞ…」

私は顔を上げ、平静を装った。

正直なところ気が気でない。自分の料理を人に食べてもらうなど
初めてだからだ。

肉は食べにくい大きさでないだろうか、味付けはこれでよかった
のだろうか、少々熱すぎやしなかっただろうか。

いろいろ心配したが、どうやらその必要はなかったようだった。
ご主人は、おいしい、おいしい、ときりに感心しながら食べてい
る。なかなかすごい勢いで箸が動いている。意外と食べるな、ご主
人。

そんなご主人を見ていたせいか、あろうことか、またあのいやし
い腹の虫が音を立てたのだった。

いや、確かにご主人の夕餉を用意するのに夢中で、今日は何も口
にしていないが何も今鳴らなくても…。

そう思っご主人を見ると、案の定ご主人もこちらを見ていた。
失態だ。

思わず、頬に熱が上る。

だがご主人は、私の腹の虫の粗相を、特に失態とは思わなかった
ようだった。

柔らかな表情のまま、こう言われた。

「ふふっ、ナズーリン。あなたも一緒にどうですか？」
鍋を指して、そんなことを言われる。

それは…その誘いは、受けてよいのだろうか。

「……あう……ええと」

なんとなく受け難い気がして、あいまいな返事をする私に、今度はご主人が止めを刺した。

「遠慮しないでいいですよ。あなたが作ったのだから、あなたにも食べる権利があります」

きっぱりと言うのだ。

そして鍋から肉やら野菜やらを取り出して、別の小皿によそうなり私に差し出した。

「ほら、お食べなさい。おいしいですよ」

おいしい、と。そういつてくれるだけでもうれしいのに。なんてありがたい誘いであったことか。

ご主人の微笑みが、見たいと欲したあの微笑みが、滲んでしまうくらいに、うれしかった。

あんなにもうれしい夕餉は、思い返せばなんと涙で濡れた夕餉だったろう。

なんと幸せな涙が流れたことか。

「ありがとう、ナズーリン」

「また唐突に、何ですかご主人」

私は気が付くと、彼女を引き止めておもむろに感謝の言葉を発していました。

当の彼女のほうは、あまりに突然のことできょんとしていました。

私の方では、そう感謝してしかるべしと思っていました。

きっとそれは、ほんのりと漂う夕餉の香りの誘いであったと思うのです。

「いえ、あなたが最初に用意してくれた夕餉を思い出したんです」
あれは聖がいなくなってから少し後のことでした。御堂にこもり
無常の世に打ちひしがれ、己を呪い続ける日々を送っていた時のこ
と。

私の閉じた心を叩いたのは、あなたでした。

外から何を言われても動く気でなかった私でしたが、あなたがか
けた一言には意表をつかれました。

夕餉を用意した、と言うのです。

あなたが夕餉はおろか、何か食事を用意するところなど、私は見
たことがなかったのでいくらか疑ったものです。

ですが、それは本当の事でした。

それも、ただの夕餉でなかった。

あなたなりに、私が元気になるように。配慮を尽くした夕餉だっ
たでしょう。

「今でも思い出します。あの暖かい味」

あなたは隠し通したつもりかもしれませんが、指に巻いた包帯も、
しつかり目に留めていました。

私などのために、なれぬ事にさえ手を出したのでしょう。

それに気づいたとき。目前の食事に肉が入ってるとかどうなど。

私の中でもよくなりました。

純粹に、あなたの気持ちがうれしかった。

あなたはきっと知らないでしょうが。その時のあなたの姿、それ
が滲むほどに、うれしかったのですよ——？

「また、私のために作ってくれますか。ナズーリン？」

「また…とは、夕餉を、ですか」

「はいもちろん、駄目ですか？」

「まさか。…ご主人が、そう望むのなら。喜んで」

「そうですか、なら、楽しみにしておきましょう」

微笑みながら、私はそういいました。その時のことを思い出しているのでしょうか、彼女はうつむき気味にうなずいただけでしたが、これで明日あたりの夕餉が鍋になるのは確実でしょう。

ひさしぶりに、彼女の味が食べれそうだったので。私はついうれしくなった。

それが彼女がいつも側に居てくれることの証明になりそう。

私はただ、それが確認できたのみで幸せだったのです。

「おーいっ、二人とも！ご飯だぞーっ」

本堂の方から、村沙でしょうか。声が聞こえます。

どうやら夕餉の支度が出来たようでした。

おそらく本堂には、一輪や、聖も。先に居る事でしょう。

「はい、今行きます」

私はそう答え、机の上に広げた書物をひとまずしまい。立ち上がりました。

彼女もまた、私が立つのに合わせて立ち上がりました。

今の私には、かつての仲間たちも戻ってきて、なにも不足するところなどなく幸せです。

でもふと思う時があります。

もし今『彼女』を失ったら、私は立ち直れるでしょうか。

答えは、否、です。

「行きましょうか、ナズーリン」

「はい、ご主人」

いつも、私の側に付いてくれる彼女。

その温もりがなにより愛しく、その心遣いがなにより心強い。

いつまでも二人で歩む事が出来たら、と。

私は心から願います……。。

私が、毘沙門天だと言うのに。

彼女が聞いたら、鼻で笑いそうだと思いますながら。

暖かい夕餉の香りに、主従の想いは重なり合う。

お互いの姿が、互いに滲むと気づくことなく。

ただ想いのみ、澄んで伝わる事もない――。

(後書き)

※言い訳は活動報告でします(

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6187o/>

とらのいをかるねずみ

2010年10月31日18時18分発行